俳句文学館

発行所
社団法人
俳人協会
東京都新宿区
百人町3—28—10
郵便番号160
電話（03）367—6621（代）
発行人　草間時彦
定価　100円（送料別）
（年1.000円
送料300円）
振替口座東京
6—273番

百余名が熱心に受講

中・高校教師の国語研修会

俳句の深さを探究

酷暑の三日間をみっちり

既報の国語研修会は八月八日、開講された。中学、高校の教師が国語の授業の場で俳句をどのように教えるかという切実な問題を中心に、三日間の熱心な研修講座が展開された。受講者は百十三名。八十名の予定をどうしてもという熱心な申込みが続いたため、二十名の増加を認めたという事務局の話である。そのため、俳句文学館の地下大会議室は一杯の盛況となり、講師が第一列に行くのに、椅子を縫って行く有様となった。

北から南から・・予定越えて

研修会三日目の句会風景

受講者は大部分が東京、千葉、神奈川、埼玉の近県の人が多かったが、青森県の阿久津涼河さん、長崎の縣恒則さんなど遠くからの参加も目立った。

第一日は大野林火俳人協会会長の挨拶のあと、後援の文化庁から犬丸長官の代理、白井文化普及課長が「文化庁としてもこの企画に大いに期待している」との挨拶があった。

そのあと、東海大教授石井庄司氏の「教室での俳句の取り扱い方」と題する講演があった。石井氏は国語教育の泰斗であり、また俳人としては、「若葉」同人で、最近、句集「春一番」を上梓されたばかりである。

午後は、文化庁国語研究所飯豊部長の「動く日本語」、成城大教授尾形仂氏の「芭蕉に学ぶもの」と題する二つの講演が行われ、受講者に大きな感銘を与えた。

「句会」の楽しさ味わう

第三日の記録

北沢　瑞史

第三日　八月十日（木）　晴天

「実作指導（句会）」参加者九十名。

第一日、二日を通じて、俳句の本質論、解釈の方法、鑑賞の基準、指導の方法についての講座が進められて来た。しかし、俳句を知るには、実作がなによりも近道であること、加えて俳句が持つ座（連中）の文芸の特性を知ることも意味があると、企画された「実作指導（句会）」である。

実行委員会では、句作が敬遠されて欠席者が増えるとの懸念をもったが、予想を上回る出席者を数えた。

午前十時、「句会について」成瀬桜桃子氏。実作の前に句会の説明がある。

句作の基本から、兼題、題目、投句（出句）、清記、選句、披講と句会（運座）の方法、進行の手順を初心者向けに懇切な説明である。氏独特のユーモアを交じえた話術に、会場の緊張がほぐれてゆくふん囲気である。

十時三十五分。句会選者（指導者）と世話係を紹介。成瀬桜桃子、原裕、岡本眸の三氏が、分かれて句会の指導に当る。

十時四十分。草間時彦理事長が閉会の挨拶。

十時四十五分。その場で、三句会の人数の組分けを行い、直ちに各会場の句会に入る。

成瀬桜桃子句会（助手、樋笠文）

原裕句会（助手、北沢瑞史）

岡本眸句会（助手、館岡幸子）

各会場、選者の人柄が反映、それぞれのふん囲気で進行。席を離れて廊下で句作に耽ける人、眼を閉じて呻吟の人、歳時記を手にして話し合う人、実作経験者らしい人、初心者らしい人と多様である。

十一時半投句締切、遅れることなく全員投句を済ませる。時間厳守は、さすがに先生方の集まりである。清記終了後、緊張感から解放されて、ほっとした空気が流れる。昼食をしながら相互に自己紹介をし合ったり、本講座の感想、各講師の講演内容にまで話題はおよぶ。

十二時四十五分。選句に入る。清記の回し方。予選・本選（五句）の説明のあと互選に入る。難解な句、不明な句に隣同士ささやき、うなずき合う様子。あちらこちらで選句のむつかしさ、それも五句に絞る苦労の声があがる。

句の内容は、兼題をもうけた会場では、それなりの句が並び、研修講座、俳句文学館周辺、都会の風物、その他と句材も多種にわたって、意欲的な面が見られる。

披講と名のりは、最も句会らしいふん囲気になるものだが、初心者が多いこと、全く新しい顔ぶれで、うまく「名のり」をあげられない、恥らいながらの小声で、日頃の先生らしからぬ場面も見られるのは、初体験のため無理からぬところか、採点者が苦労することしきりである。それでも、結構楽しんでいるように見られた。

選者の講評は、句作りの心得、ことばの選択、季題の受けとめ方など、実作体験にもとずいて語られる。しかも、当日の句を取りあげての批評には、自分の選句眼をも確めるには好都合とあって、熱心に傾聴。着想と表現とが一致しない句の指摘、添削と懇切な指導に、身近で、しかも具体的な例であると好評。受講者が熱心にノートを執る姿勢に、俳句実作にもなみなみならぬ意欲が見られたのが印象的であった。

第一日、二日の講座内容の総まとめに、俳句の感触を確かめるにふさわしい「実作指導」として受け取られたようであり、成果も認められたと評価してよい。

（当日の秀句と受講者の感想は次号に）

二日目は鑑賞講義

パネルディスカッションも

第二日は午前中に松本旭、清崎敏郎両講師によって、「俳句鑑賞の基本」と題して、古典俳句、現代俳句の鑑賞を講義。この問題は学校における俳句の教え方ともつながるので、受講者に多大の興味ある問題だったようである。

第二日の午後は本研修会のピークであるパネルディスカッションで、香西照雄氏の指導。パネルメンバーは次の通りであった。

石川一誠（神奈川県教育センター国語研究室）。同氏は歌人としても高名である。西河良則（新宿区立西戸山中学校教諭）。俳人ではないが、教育の現場にある人をということで特にお願いした。それに加えて、俳人で学校の教育の場に立つ人として、鍵和田釉子、北沢瑞史の両氏。さらに教育とは関係ない人で、現代俳人を代表して鷹羽狩行氏という五名である。

この顔ぶれの選び方については、沢木委員長を初めとしての実行委員会で大いに苦心したものだという。この種のパネルディスカッションでは、座長が聴衆から発言を引出すのに苦労するものであるが本研修会の場合は質問や意見の発言が相ついで、座長が整理をするのに大わらわという有様だった。

第一日・二日の講演・パネルディスカッションの概要についてはページの関係上、次号に、掲載する。

沢木実行委員長談

「研修会が無事終わったことについて皆さまのご協力を感謝します。このように盛況で、しかも熱のこもった内容になったことはまことに嬉しく思います。この種の企画が現場の教師に喜んで迎えられたということは、俳人協会としてまだまだやらなければならないことがあるということで、来年はもっと充実した形で、研修会を考えてみたいと思います」。

草間理事長談

「俳人協会では、懸案であった講座が、企画のむずかしさ、講座の内容、受講者の対象（地域的にも）の検討、受講者数把握の問題と、初めての試みであるために予想がたてられないこともあり、充分に意を尽せたとは思わないが、定員以上の参加者を得て、またお断わりしなければならない希望者があったことは、改めて今後に残された課題として、運営・内容の面からと、併せて検討して行きたい。準備期間もきわめて短く、その上会場も狭く、みなさまにご迷惑をかけ、窮屈なお思いをさせたこともおわびいたします。

先生方も、本講座で得られた知識と経験を、それぞれの学校へ帰られて、教育の現場で生かされるように願います」。

九月集

夏靴の軽きを好み履き古りて
白粉花や心はかるは愚かしき
暑に負けて人の振舞い見てをりぬ

散歩靴　島村　茂雄（伊東）

冷やかに犬山城を目にしたり
暮色とは古色と通ひ城の秋
秋の風轟と犬山城頭に

城の秋　成瀬正とし（東京）

しばらくは盆路牧の馬柵にそふ
蛇搏ちし磧を水が急ぎゆく
門川の真水の匂ふ二十日盆

盆路その他　小原　啄葉（盛岡）

燕雀に甘んじて干す梅の夜
古賀政男逝きぬ天神祭の炎
百日紅しきりに通うもののある

天神祭　高木青二郎（宝塚）

日盛りの足もと匂ひ海の紺
空の秋色雲ひろげゐて寧し
雀あそぶ道のべ夏暁の彩はやも

海の紺　今枝　蘗人（徳島）

好評だった句会の指導

第三日は、三組に別れての句会で、俳句は初めてという人々が句会をどう受入れてくれるか、実行委員会としては甚だ不安だったが予想に反して、これがもっとも好評だった。句会という伝統的な形式の魅力の深さを考えさせられたのである。句会については別掲記事を参照願いたい。

句会が終わって、予定のスケジュールをとどこおりなく終了したのは八月十日午後三時で、相変わらずの暑い日ざしが照りつける日だった。

冬秋夏春

昨年、九十七歳の高齢で他界した熊谷守一画伯の遺作展が東京・池袋の西武美術館で開かれた。会場の入口で「熊谷守一」という映画を上映していたので、展覧会場に入る前に、まず映画を見ることにした。新劇の宮崎恭子さんが熊谷画伯にインタビューする▲画伯が「庭にころがっている石ころを何日見ていてもあきない」という意味のことを答えていた。美術評論家の今泉篤男氏が「熊谷さんの絵はいってみれば日本の短詩型文学と一脈通じるものがある」と解説していた▲朝日新聞の小川正隆氏は、この展覧会の感想記事の中で、「一筆、一筆に心をこめた精妙な絵はだの美しさ、自然の特徴をその無心の観察から清純にとらえた、いわば『俳句』的イメージが、小さな画面に日本人の深い感性の世界を示している」と書いている▲野間仁根画伯は「熊谷さんの絵は決して『旧派』の絵ではない。短歌なら啄木、俳句なら山頭火や碧梧桐。先鋭なものを秘めた」絵だといっている▲遺作展を見回った俳人の私は、単純化されたフォルムと熊谷調ともいうべき輪郭線のはっきりした鮮やかな色面構成に打たれ、逆に、こういう単純化された味のある俳句ができないものかと思った。

（富田直治）

古代から現代までの地名を集大成する空前の規模と内容の本格的大辞典

角川
日本地名大辞典
県別47巻・別巻（総索引）

▼編纂＝財団法人角川文化振興財団
▼「角川日本地名大辞典」編纂委員会
▼編纂委員長＝竹内理三
第一回配本　53年12月1日発売

13　東京都

本文一、四〇〇頁図版多数・口絵カラー一六頁
定価　六、四〇〇円・発売記念特価　五、八〇〇円
（特価期限　昭和54年12月末日まで）
●第二回配本　25　滋賀県　54年3月刊
予価　六、四〇〇円
●第三回配本　32　島根県　54年6月刊
予価　五、八〇〇円
体裁＝菊版・函入・平均一、〇〇〇頁・7ポ二段横組
▼全巻予約募集中——特典・専用書架贈呈
東京都千代田区富士見二
（〇三）二五六—七一一一　角川書店

新編
俳句歳時記

もっとも現代的な角度からの季題選定。精密、正確、懇切な解説、全国の結社を網羅する新鮮で豊富な例句を収載！

講談社版／全五巻
編者＝清崎敏郎／草間時彦／鷹羽狩行／野澤節子／森澄雄（五十音順）

■全巻編成
『春』　鷹羽狩行＝編—好評発売中
『夏』　草間時彦＝編—好評発売中
『秋』　清崎敏郎＝編——八月刊
『冬』　野澤節子＝編——十月刊
『新年』森澄雄＝編——十二月刊

■収録内容
全巻季題・季語　二〇、〇〇〇
全巻例句　四〇、〇〇〇

■造本・体裁
新書判横長（16・8cm×10・8cm）
口絵＝カラー八ページ
本文＝約四四六ページ

■定価　一、二〇〇円

講談社

近況お知らせします

協会賞受賞者（上）

俳人協会賞選考の季節が近づいたので、従来の受賞者の近況をご報告いただいた。それぞれ個性のある文章を書いて下さったことをお礼申し上げる。

また、受賞者のうち次の四氏は既に物故しておられる。謹んで哀悼の意を表するものである。石川桂郎・西東三鬼・相馬遷子・石田あき子。（物故受賞者の関連事項は編集部担当）

【第1回】石川　桂郎

近く、俳人探訪記「面会洒舌」が刊行される。（川崎市多摩区登戸二四二八　手塚マンション二〇六内東門書屋刊）

【第2回】西東　三鬼

神戸時代の記録が「冬の桃」という題名でNHKテレビにより放映された。

【第3回】小林　康治

第一回石川桂郎、第二回西東三鬼と二人の先輩が早逝したので今度はお前の番だと人が言う、そんな齢になってしまった。第四回以降の受賞者のためにもまだ死ねない。相馬遷子氏の急逝は本当に残念だった。「泉」を主宰してこの秋でやっと五十号、同年輩の作家が十周年、百号と祝っているのに甚だたよりない。月刊俳誌発行の煩雑さに追われて俳句関係以外の書籍がおおむね「積んどく」になってしまうのがたまらなく無念に思われる昨今である。

【第4回】千代田葛彦

七月末までに原稿を頂ける由で返事を下さいましたが、九月一日現在未着です。（編集部）

【第5回】鷹羽　狩行

生き甲斐が二つあっては、からだがもたない。それでサラリーマンのほうを捨てたのが、昨年の五月。俳句専業となってホッとしたが、実際はますます多忙になり、十月号からは「氷海」を「狩」と改題して、秋元不死男先生の遺業を引きつぐことになった。これは「瓢箪から駒が出」た思い。

今年はウマ年で、私も昭和五年のウマ年生まれ、十二年前のウマ年に俳人協会賞の幸運をつかんだときにも、右のコトワザを思い出したことだった。

【第6回】磯貝碧蹄館

千葉の中央セントラルプラザで大がかりな俳書展を開くので頑張っています。句と書一体の道を望み、活路を開こうと思いますが脳の中の動脈りゅうが破裂したら、今度こそ終りです。神仏のおかげで第二の生を賜りました。妻は小学二年から寒行や読経をしています。

この生きぼとけに愚息が悪態をついたので往復ビンタを喰わせました。僕も開経偈一巻を暗唱、朝夕合掌をしてます。婦唱夫随、心を和やかに人生の後半を僕流に生きたい所存です。葡萄酒を少し医師から許されました。

【第6回】稲垣きくの

齢をとるというのはありがたいもので、感度が異常になるのか、うれしいことにはひどく敏感で三歳児のように喜んでしまう。けれど、くやしい感情などは鈍った方で受止めるのか、人ごとのように遠く感じられてわれながら都合よいのに驚く。そんな日常の、異例の猛暑の中で、私はいま第四句集をまとめる仕事に手を染めている。清涼剤にはテレビの高校野球があり、よいゲームだと仕事も忘れてだらだら一日見てしまう。八月十五日の〆切はわれながら迂濶であった。

【第7回】及川　貞

あの時全く予期は勿論夢想もしない受賞でかへって感激と言へるものも生まれなかったかも知れません。実は私は句は其場限りのものでもいいと思って過去の作品何一つ清記していません。この度自註シリーズに入れて載く事になりハタと困りました。材料の揃えようがありません、幾つかの記憶に残る句はあっても。でも倖せにも親しい句友が私のような者の句でも全部書き置いて下さっておかげで何とかまとめ得ました。其他の身辺何も語るほどの事はなく老夫妻とは言へ一日も退屈する事なく、意のままに。

【第7回】菖蒲　あや

○月○日晴　朝から暑い。いつもの時間に目を覚ます。昨夜も暑くてあまり眠れず頭がぼんやりしている。休みたい。いやいやと気を取り直しいつものように満員電車にもまれて出勤、夜になっても暑さ去らずくたくたに疲れ果てて帰宅。何をする気もおこらない。仕事がきついのか、体力の減退か、ちょっと寂しくなる。机の上の水中花がすっかり艶をなくしている。明日こそ貰い替えよう。それにしても休日が待ち遠しい。長過ぎた動めも先が見えて来た。定年にあと幾ばくもない。定年になったら習いたい事、やりたい事がたくさんたくさんある。たのしみである。それまではわれとわが身を励まして精いっぱい働こう。

（ある日の日記より）

【第8回】上田五千石

五月二九日、ミルトン・ケスラー氏（ニューヨーク州立大教授・詩人）と対談。農耕民族と遊牧民族の詩について話し合う。

六月二日、長谷川富三郎先生板による「畦」五十号の表紙、出来る。扉面に彫られた薔薇が微笑している。すなわち同人たちと祝杯。

六月七日、テレビ静岡「静岡の人」ビデオどり。十五分ものに数時間のロケ。今村楯夫君（貿易研修センター助教授、早大講師）が相手役で、楽しくて、疲れない。

六月一四日、旬集「森林」を編む。決定稿に至らず。

ご馳走の記憶

戦争の終った翌翌年の四月大野林火は豊橋を経て舞鶴に旅をした。豊橋では太田鴻村居をはじめとして三日間滞在したが、その三日間の御馳走は次の通りだった。大野林火は今でも覚えているという。

第一日　野菜のごった煮と白米

第二日　近くの黍畑の砂糖黍から採った黒砂糖の羊かん

第三日　鯛とどぶろく

鯛とどぶろくは豊川の局山美水宅。美水は麹屋である。当時を回想して大野林火は言う。

「私は酒をのまないので、甘酒にして貰いました。その当時としてはたいへんな御馳走ですよ。白い飯がうまくてね……」

林火の代表作の「ねむりても旅の花火の胸にひらく」はこのときの作である。

俳壇ごぼれ話

井沢正江　午前中の俳句教室

午前中の講座を、というご希望に応えました。

講師　井沢正江　連続講義（六回）

会場　俳句文学館　午前十時より正午まで

開催日　七月八日、八月十九日（以上済み）、九月九日（土）、十月十四日（土）、十一月十一日（土）、十二月九日（土）

申込先　俳人協会　講座係（中途申込み受付けます）

西垣脩氏を悼む

皆川　盤水

八月一日の朝、細見綾子さんから、西垣脩氏が急に亡くなったという電話がかかって来た。私は思いがけないその報らせに思わず大きな驚きの声をだした。そして、その場で直ぐ、明治大学の同僚である川崎展宏氏（俳人）に電話をすると、氏も、西垣氏の急逝を、私の電話の直前に知ったらしく、まだ電話口で落着かない様子だった。

死因は心筋コウソク、場所は世田谷中央病院ということであった。

西垣氏の近況は、去る六月、二週間ほど、詩人の高田敏子・作家の伊藤桂一氏らと、中国政府に招へいされ、無事、大陸の旅を終えて帰京し、元気に明治大学に通勤しているということを耳にしていたので、突然の訃報には全く驚いてしまった。

特に御家族初め生前の氏と親しかった方にはなかなかあきらめきれぬものがあったに違いない。

西垣脩氏は本名脩（おさむ）、大正八年五月一九日（五九歳）、大阪市南区順慶町一ノ四〇、即ち「船場」に生まれた。

俳句は昭和一二年、旧制松山高校時代、「松高俳句会」で川本臥風氏の指導を受けて「石楠」に拠り、東大国文科時代にはその「石楠」の新人のひとりとして頭角をあらわした。「石楠」廃刊後は同人誌「皿」を創刊したが、のち「風」同人（昭和三一年）となり、豊富な教養と寛容な人格で、「風」はもとより俳壇の多くの人びとから親しまれていた。

遠照る妻生いつもつめたくそよぎゐむ

水中花ひらききりしがやや傾く

片陰をうなだれてゆくたのしさあり

さやけてく妻とも知らずすれちがふ

寝酒さがす三時花吹く風きこゆ

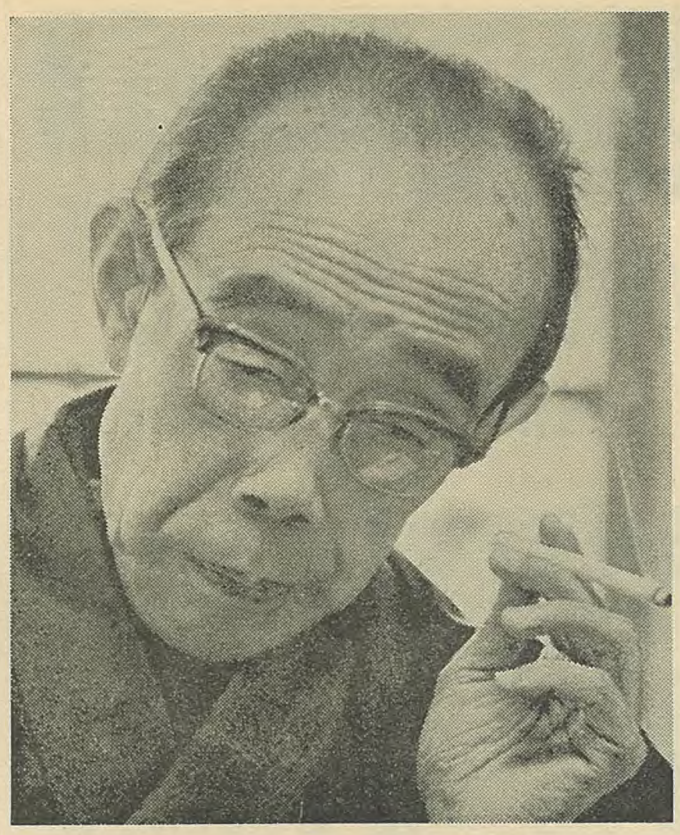
など、作風は繊細で感受性鋭くまた。柔軟・清冽なものがあった。著書には編著「近代俳人」・「現代俳人」「現代俳句を学ぶ」など、俳句文学館図書委員、俳文学界の理事などを勤めていた。

氏は、また、詩人として著名であった。師は鋭い抒情詩人といわれた故伊東静雄。住吉中学時代には、「路」を、また、のちには「山の樹」を編集し、生前は「青衣」などの同人であった。著書には「皿」・「一角獣」などがある。

告別式は八月三日、新宿の大宗寺において行われたが、折りからの炎天下にもかかわらず別れを告げる俳人・詩人・明治大学関係者で盛儀を極めた。俳人を代表して沢木欣一氏が弔辞を捧げた。

謹んで御冥福を祈りたい。

顔⑭



安住　敦

心身爽快の日々を

俳句文学館の建設途上で建設委員長の角川さんに亡くなられるなど、理事長をおおせつかったこの六年間は、文字通り苦労の連続で、夜もおちおちねむれませんでした。こんど副会長にしてもらったので、ただいまはきわめて心身爽快です。会長の大野さんとうまが合う仲ですから、まあ、足りないところは助けあって、うまくやろうやといっています。

年寄りですから、朝はわりあい早く目が覚め、ひとり静かに起き出して、お茶などいれたりして、机に向かいます。月のうち約半分は「春燈」の雑詠の選の仕事、あとの十五日ぐらいが自分の仕事と勉強ということになりますか。健康法といって、とり立ててやってはいませんが、一時間半ばかりを散歩の時間にあてています。この時間が俳句を考えたり、種を仕入れたりする楽しい時で、三十分ほどは町の喫茶店に寄ってコーヒーをのむというのが日課となっています。

内臓のほうは別にどこといって悪いところはありませんが、首から上が故障だらけ。右眼は黄斑部裂孔といって、ものを見ようとすると見えなくなる病気、右の耳もほとんど聞こえませんし、口には上顎にときどき膿泡ができるようになり、手術を繰りかえしています。

たばこはチェリーを四十本から五十本、ちょっと多すぎますが……。肺ガンを守る会に入って一年に二回定期検診を受けており、いまのところ異常はありませんから、ご安心下さい。

（富田直治）

【岸田稚魚氏撮影】

俳人協会賞選考委員決まる

本年度の俳人協会賞選考委員と同じく予選委員として次の諸氏が委嘱された。予選委員会は十一月中旬、選考委員会は十二月二日開催の予定である。

【選考委員】（本賞担当）

安住敦・石城暮石・大野林火・岸風三楼・香西照雄・沢木欣一・野沢節子・能村登四郎・平畑静塔・福田蓼汀・皆吉爽雨

【選考委員】（新人賞担当）

井沢正江・加倉井秋を・岸田稚魚・清崎敏郎・草間時彦・進藤一考・鷹羽狩行・千代田葛彦・成瀬桜桃子・原裕・松崎鉄之介・森田峠

【予選委員】

池上樵人・石田勝彦・有働亭・上田五千石・岡田日郎・岡本眸・神蔵器・古賀まり子・高田風人子・辻田克巳・中戸川朝人・樋笠文・深見けん二・皆川盤水・村田脩・山崎ひさを・山田みづえ・吉田鴻司・和田暖泡

お願い

近く俳人協会賞の選考が開始されます。昭和五十二年十一月から五十三年十月末までに刊行の会員の句集が対象となります。会員のうち該当する句集の著者で、まだ、その本を俳句文学館にご恵贈頂いていない方は、お送り下されば有難く存じます。

俳句文学館　村山古郷

吉田鴻司俳句教室

講師　吉田鴻司　連続講義（五回）

時間　午後一時三〇分より四時まで

会場　俳句文学館

開講日　十月四日、同十八日、十一月一日、同十五日、同二十九日　各水曜日

受講料　全五回四、〇〇〇円（協会員三、五〇〇円）一回一、〇〇〇円（協会員八〇〇円）

申込先　俳人協会　講座係

延二〇〇余名の代表作が一堂に
全俳人・文筆者に待望の必読書
俳人協会編
四季随筆（夏）
●好評発売中／B6判／定価1、500円
■何回読んでも良い作品、或は読みたくともどこにあるかわからなかった名編の数々……。俳人協会に結集する多彩な現代俳壇の中心メンバーの力作を網羅し、春・夏・秋・冬に分類して刊行する「四季随筆」！

●家作録収（夏）筆随季四●

第一部
富安風生　草間時彦　渡辺夏舟　宮下翠舟　井沢正江　笠原てい子　杉本寛　不破博　辺見京子　本多静江　山田みづえ　井上雪　福田蓼汀　中村草田男

第二部
水原秋櫻子　岸風三楼　石田あき子　橋本風車　鷹羽狩行　渡辺千枝子　吉田洋一　石川昌子　福永耕二　桂樟蹊子　鈴木白眉　細見綾子　中村草田男　中村汀女

第三部
山口青邨　堀口星眠　鈴木真砂女　佐野まもる　右城暮石　龍岡晋　小林清之助　木下子龍　星野立子　大野林火　皆吉爽雨　山口誓子　富安風生

東京美術
東京都千代田区神田司町2―7
振替／東京3―13186
電話／（03）292―3231

俳人協会・俳句文学館主催
色紙・短冊　九州展示頒布会
このたび左記要領により、福岡市で色紙・短冊展示頒布会を実施いたします。好機会でもありますので、多数の方のご来場をお待ち申し上げます。（入場無料）
期日　九月二十七日（水）二十八日（木）二十九日（金）三十日（土）十月一日（日）二日（月）の六日間
10時～18時（最終日は17・30時終了）
会場　福岡市博多区中洲三丁目七ノ三〇
福岡玉屋デパート、七階特設会場
出品者　秋桜子・風生・青畝・誓子・草田男・林火・敦・爽雨・蓼子・登四郎・晴子他地元作家を含む四〇名
出品　料紙、色紙、短冊
実行委員長　小原菁々子
連絡先　〒815福岡市南区屋形原八五九―五八　岡部六弥太

俳人協会新会員

8月末現在

東京都

秋吉嘉寿子（薬殻火）井上治憧（若葉）岡崎五子（鶴・若葉野）金子逸石（雪解・懸巣）境入笙太（泉・鶴）西條雅子（雲海）鈴木万佐子（万書）淵岡なほ子（鹿峨野）徳永希代子（かまつか）土居すみ子（鹿峨野）成瀬正とし（ホトトギス・玉藻）冬木津弥子（琅玕）堀江都紫（馬酔木）坊城佐和子（雪解）山本真畝（萬緑）中野横沙丘（雪解）伊藤みどり（馬酔木）飯田きよし（若葉）小竹三餘（若葉・みちのく）鹿毛一枝（若葉）桂玲人（雪解）小山まするえ（山火）佐竹喜美子（若葉）島田芳浩（若葉・草紅葉）高橋邦夫（風土）三浦美津子（萬緑）森白及（若葉）八木よね（若葉）米沢はる子（雪解）菊池かや（若葉・春嶺）白井松石（ホトトギス・欅）吉田文（若葉）清水晴天（同人）下門久子（雪解）山本ひでや（若葉・みちのく）

千葉県

瀬戸誠子（幸野）古川孤舟（かまつか）森野千司（青潮・草の戸）山口笙堂（ホトトギス・玉藻）芳聞南風子（鶴）金坂呉風（夏炉）松村武雄（沖）渡辺蘭歩（鹿火屋）石井白月（若葉）上谷昌憲（沖）

茨城県

長内洟子（河・ひたち野）村上佳都楼（若葉・白魚火）鳥塚春郊（若葉）

埼玉県

江本万里子（河）落合敏（万）

神奈川県

今井湖峯子（草紅葉）近江一一（春嶺・若葉）大野雑草子（無所属）小林幸子（万峯）笹川菊子（玉藻）塩入みすゞ（ぬかご）椎名陶村（雪解）高木晴子（玉藻・ホトトギス）竹村助三郎（万書）田中一草（雪解）堀江君子（河）松村樹海（暖流）高田風人子（ホトトギス・玉藻）大川酔浪子（同人）田村すゝむ（風土）中島花会（風原）亀山其園（玉藻・ホトトギス）

静岡県

神谷久枝（海坂・万書）松島不二夫（沖）園部雨汀（風土）山口郭公（若葉・岬）渡井茂子（裸子）田中紫水（若葉）

愛知県

猪岡和郎（鵜・馬酔木）内田幸子（天狼・樅）太田雅峯（雪解）久世きよ子（雪解）鈴木ゆりほ（雪解）星野秀則（馬酔木・鵜）戸田郁（雪解・うまや）間川文子（雪解）猶村博子（雪解）渡辺仏子（若葉・春郊）辻美喜路（若葉）広瀬珠江（向日葵・馬酔木）

大阪府

今井妙子（雨月）飯塚やす子（天狼）遠藤勝亮（馬酔木・雨月）緒方邦安（無所属）小林静学（早春）雑賀昌月（河）成宮弥栄子（天狼）西井静子（かつらぎ）三崎悦子（諷詠）三嶋八千穂（天狼）熊野鳥湖（天狼）瀬戸白魚子（かつらぎ）立花みと（天狼）長沼富久子（馬酔木・蕪巣）原夏子（天狼）松田百合子（馬酔木・蕪巣）宮井しづか（雪解・貝よせ）宮本鈴（天狼）池垣薫庵子（向日葵・馬酔木）

京都府

丹羽愛子（諷詠）山口俊雄（歩道）上田千穂（若葉）山根美代子（天狼）

岐阜県

白田喜代子（氷海）村田磨（游魚）柿公（鶴）新井きよし（若葉）風間加代（琅玕）高山松男（若葉・岬）沼野耕人（若葉）若林正男（鶴）新井一耕（若葉）大河内議邦（鯱・馬酔木）宮川鶴杜子（游魚）

三重県

墨田甫水（天狼・七曜）

滋賀県

川上なみ子（浜）中村羊雲（花藻）寺沢夢宵（雪解）溝口理水（雪解・うまや）木村長月

奈良県

小西須麻（かつらぎ）森脇恵香（河鹿）西岡ヨシ子（天狼）

和歌山県

小野田凡二（けいてき）藤田邦佳（鹿峨野）小坂南枝（雪解）

兵庫県

計馬二九人（雲母・潮騒）坪井柴田白汀（雲海）古賀寿美人

福岡県

越智春虹女（渋柿）神野都紫女（渋柿）坂本碧水（航標・いたどり）伊勢谷紅月女（渋柿）中村石笛（炎昼）加藤多司詩（若葉・糸瓜）土居三路（若葉・糸瓜）

佐賀県

吉村しげ伸（海郷）

愛媛県

高柳里人（樗）成瀬敬子（胡桃）林伊都子（水海）佐藤和子（鶴・胡桃）

北海道

北光星（道）小森行々子（花鳥）三輪フミ子（ホトトギス・玉藻）山口透（夏草）長島弘（若葉・青女）山田無香（若葉・春嶺）福川ふみ子（春嶺）

島根県

安達波外（城）

岡山県

河田紅村（春燈）藤原滋章（春嶺）荒瀬秋圃（天狼）延江金児（天狼）生田秀夫（風土）

広島県

折井雅水（春嶺）近藤秋刀（馬酔木・早苗）綱田酔雨（雷斧）永井みえ子（雪解）

山口県

川村虫民（春嶺）吉屋真砂（雪解）来間鷹男（春嶺）藤井吉道（春嶺）

香川県

合田岩雨（雪解・椿）

徳島県

佐々木一止（夏草）

宮城県

大井国見（若葉）豊田呼星（若葉・ホトトギス）山田碧江（鶴）

山形県

木ノ下木雞（雪解）

福島県

小浜十四子（年輪）今和泉和子（年輪）

福井県

楠本信子（椎の実・蘭）

鹿児島県

中尾無涯（馬酔木・椋梧）木竹富江（同人）福田章人（同人・うぐいす）

宮崎県

神谷竜司（円・同人）吉武歓之助（万灯）浅原茴嗣（雲母）

長崎県

三木夏雄（樗）大槻ゆうの子（かつらぎ）山中菅代（天狼）田中丸芝鳴（同人）

静岡県

神谷竜司（円・同人）吉武歓之助（万灯）浅原茴嗣（雲母）

長崎県

中尾無涯（馬酔木・椋梧）木竹富江（同人）福田章人（同人・うぐいす）

宮崎県

楠本信子（椎の実・蘭）

鹿児島県

小浜十四子（年輪）今和泉和子（年輪）

福井県

木ノ下木雞（雪解）

福島県

大井国見（若葉）豊田呼星（若葉・ホトトギス）山田碧江（鶴）

宮城県

佐々木一止（夏草）

山形県

高柳里人（樗）成瀬敬子（胡桃）林伊都子（水海）佐藤和子（鶴・胡桃）

北海道

北光星（道）小森行々子（花鳥）三輪フミ子（ホトトギス・玉藻）山口透（夏草）長島弘（若葉・青女）山田無香（若葉・春嶺）福川ふみ子（春嶺）

神奈川県

山梨県

長野県

新潟県

滋賀県

兵庫県

福岡県

活発に意見出る

協会員の集い　俳句大会、色紙展も

岐阜

【一部　俳人協会員の岐阜県の集い】

八月五日午後三時三十分より、大野林火俳人協会長、草間時彦事長を迎え、長良川畔、せいらん会館で開会された。

司会は近藤一鴻岐阜県俳人協会長。

最初に会員三十余名が紹介された後、大野会長の挨拶。草間時彦理事長より俳人協会の現況ならびに俳句文学館についての話があり、今後の在り方や、今後は海外の窓口となる抱負など。岐阜県俳人協会の第四回色紙展の充実した内容を賛え、その成果にどう目しより活発な意見が開陳されるなど和かな懇談が行われた。

その主な事項を列記すると

一、俳人協会の地域性を考慮した組織化を早急に討るべき時期に来ているのではないか、そうして地方の会員の声を運営に反映させるべきではないか。

二、俳人協会報「俳句文学館」については、記事の適確なニュース性を望みたい。

三、俳人協会員の推せんについては、結社ばかりでなく、何らかの地方性も考慮出来ないか。

等、時間の許す限りにおいて話合った後、長良川畔の花火、鵜飼を会員一同で観賞し、時の過ぎるのを忘れた。

二部としての俳句大会は、八月六日、岐阜県会館で、三部としての色紙展は同月二日から六日まで岐阜市立図書館で開かれた。

―集いの会場―

盛岡に青邨句碑

「夏草」主宰山口青邨の句碑「遠山のくつがへるさま郭公鳴く」が盛岡市公民館（盛岡市愛宕町・旧南部別邸）の庭園内に建立された。盛岡は「夏草」の発祥地、主宰の生誕地である。青邨句碑建立は、かねてより懸案中のこと、昨年七月「夏草」創刊五百号

句碑の前で青邨先生ご夫妻

創刊号物語〈13〉

鶴

星野麦丘人

波郷が命名―竜之介の夢を見て

「鶴」は石田波郷を選者として、昭和十二年九月に創刊された。今日、鶴人にして記録の上でこれを知る者は多いが、支那事変が既に始まっていた十二年の秋における「鶴」を知る者は、主宰者石塚友二を除いてほとんどいないのではないか。

「先達てのこと僕は僕らの新しい雑誌の名前をつける役を引受けたが、二旦三日とたって容易にいい名前は考へつかなかった」とは、石田波郷の「鶴に似す」という文章の一節である。この中で波郷は新雑誌を「鶴」と命名するわけだが、そこのところはこんなふうに書いている。

「鶴の如しといへば、死んだ芥川龍之介が、庭の立木に登っている写真を見たことがある。この写真を今、思ひ出して考へると、たしかに彼は鶴みたいに樹にとまっていた。

翌朝目が覚めると真先に、「鶴」という言葉が意識に来た。

僕は新雑誌を鶴と命名することに少しも躊躇しなかった」

波郷の若々しいこえをきくような文章である。

では、これで創刊号は鶴となってすぐにも羽搏いたのかというと、事務的にはいささかの曲折があったらしい。

「鶴」はいきなり誕生したのではなく、母胎となった雑誌（「樹氷林」―波郷選による造兵廠グループと、「馬」―馬酔木新人会の機関誌）があったわけで、この二誌を併合して「鶴」が発刊されたのである。「樹氷林」には田中午次郎がおり、「馬」の方には石塚友二その他がいたわけである。

雑誌の表紙には九月と印刷されているが、実際には遅刊して出されたようである。編集後記を同人の関口火竿が書いているが、その冒頭に「未曾有の遅刊をして了ひ、（中略）時局を敏感に反映する務めを持っているわれわれは、一層この号の編集に心をいためなければならぬ破目に陥って了ったのである」と言っている。事変の勃発により、造兵廠グループの仕事が急に忙しくなったのであろう。遅れに遅れて気のせくまま刊行したため、発送などにも手違いを生じたのか、石田波郷にはこの第一号を見なかったという伝説があるくらいである。

二号は同人の志摩芳次郎が編集を引受けたが、この号も遅刊をしたという。第三号（昭和十三年一月号）から当時の沙羅書店主石塚友二が発行引受人となり、今日の「鶴」の基盤が置かれることになるのである。

一号は中扉に、樹氷林・馬合流記念号と刷ってあるだけで創刊号らしい装いは何もない。全四二頁で波郷選の「鶴俳句」欄は二九名を数えるのみである。今日、俳壇の新雑誌の誕生などを思うと、まことに感無量なるものを覚える。

一号には創刊号らしい装いはないと書いたが、二号には「鶴誕生を祝す」という文章があって、その中にこういうことが書かれている。

「とにかく鶴は空中に浮び出たのである。馬酔木、ホトトギス、旗艦、天の川等の雑誌は、しばらく措き、自鳴鐘、風、等特異なる新興雑誌に並び、それらの無季俳句に対して、守るべき季への信念を維持して翔びたった「鶴」は、たとへ馬酔木という強力結社誌の精神に擬るとはいへ、安逸な依頼心は微塵もあってはならないであろう」

この文章には星硯という署名があるが、これは石田波郷の匿名と思われる。既に空中高く飛翔した「鶴」に対する選者の決意が、ここにみられるといってもよかろう。守るべき季への信念、安逸な依頼心の排除、ははやくも後年の韻文精神徹底を説いた波郷の姿勢が窺はれるようである。

ちなみに創刊号の表紙は、近藤晴彦が折鶴を描いている。

折鶴を描いた「鶴」創刊号の表紙

実行委員長田村了咲の挨拶に始まり、経過報告を小原啄葉、青邨慕式は、六月二十五日午前十時より、青邨ご夫妻をお迎えして行われた。

実行委員長田村了咲の挨拶に始まり、経過報告を小原啄葉、青邨啓一氏への感謝状贈呈のあと神式により除幕。神事のさなかに句碑裏の垂幕を郭公が鳴き渡り興趣を添える。続いて各氏より祝辞。最後に青邨がたたれて、少年期の思どに触れつつ感謝の意を述べる。句碑建立地は青邨旧居に近く少年期の遊び場となったところ、「郭公」の句は昭和三十二年盛岡滞在中の作（句集『紺餐』）である。

俳人協会主催和歌山

初めて和歌山方面で懇親吟行はもちろんのこと、一般の方も参加下さい。

日時　10月22日（日）受付午

吟行地　和歌の浦・和歌山城

会場　和歌山市西汀町1　経

投句　一人3句・投句締切午

選者　今川凍光・右城暮石・

蓼子・岡本無滴子・小

林子・下村非文・豊田

・福本鯨洋・藤野基一

青・三好潤子・森白象

順）

会費　七百円（受付へ）

賞品　各選者の特選句に本部

講演　紀州の万葉と植物

和歌山県生物同

【連絡先】〒665宝塚市野上四丁

俳人協

俳人協会編「俳句

昭和五十四年版の

体裁　月別十二枚綴り壁掛用

内容　秋桜子・立子・秋を・蒼

・青邨・草田男・ひろし

順）の揮毫色紙・短冊の

句掲載

領価　一部一、〇〇〇円（協会

送料　一部全国一律三〇〇円。

二部～三部第一地帯三五

三地帯五五〇円、荷造費

四部～七部第一地帯四三

地帯六二〇円、荷造費一

八部～一〇部第一地帯四

第三地帯六九〇円、荷造

す。

十部以上は運送屋に委託

用します。

発行予定　十月中旬

申込先　〒一六〇　東京都新

俳人協会

電話

振替

俳句カレンダー鑑賞

〈九月〉

風の中の新月九月はじまれり

大野林火

第八回集「潺潺集」所載、昭和四十二年作である。白鳳社版自選自解句集には採り上げてないが、俳人協会版自註現代俳句シリーズには採録されている。

この年林火は畢生の業ともいえる「近代俳句の鑑賞と批評」を八月中に脱稿し、草津楽泉園での月見の会に出かけるのを予定していた。俳句の鑑賞などは今後一切書かないともらしていた。この原稿はこの年に入ると書き始めたものであり、八月半ばに脱稿し得た安ど感が、風の中の新月をあおいで、本来の日常生活にもどり得た解放感を味わい、「九月はじまれり」という述懐となって表出されたものと考えられるのである。林火は旅にさそわれ詳しい案内書など送られてくると丹念に読み、臨場感に胸をふくらませる。この時はそれが月への関心を呼びおこしたのではないだろうか。

したがってこの句は日常のつぶやきの作品であり、特にどこかの旅先で生れたものではない。「種蒔けば天をかぎりの夕焼ぞ」（昭・40）の句があるが句柄からいって何処か広々とした山国での作のような感を受けるが、自解によると自宅の裏山を抜けて東横線へ下った時得た作品であるという。畑で種を蒔く人を見て、帰路夕焼を仰いだという、それがこの句となったのである。情景の構成とその場の切り取り方は極めてうまい。

「早乙女を畫見きゆふべ月を見き」（昭・23）の句もどこかの田園風景のような感を受けるが、旧住所地の弘明寺裏山を抜けた田園で得たという。共に見事な構成であるが、構成されたものの感を一向に受けない。そこに林火の巧まざるうまさが介在しているというべきであろう。

林火の初期の代表句に「子の髪の風に流るる五月来ぬ」（昭・13）がある。この句には甘美な青春がただよっている。五月と九月、共に一年中で風の美しい季節である。三十四歳の林火と六十三歳の林火のちがいは、「子の髪」と「新月」とによってあらわれている。それはまた、「五月来ぬ」と「月はじまれり」とに微妙な差を示している。青年の期待感と老年者の人生へのうべないとの違いでもある。

林火は颯颯とした風を好む。自解句集よりその一端を示してこの稿を終る。

いや白きは南風つよき帆ならむ　（昭・26）

風立ちて月光の坂ひらひらす　（昭・27）

淡墨桜風立てば白湧きいづる　（昭・46）

朴の花大揺れ風を運ぶかに　（昭・47）

こがらしの樫をとらへしひびきかな　（昭・20）

主峯より風おろしきて朴散らす　（昭・36）

落花舞ひあかり花神の立つごとし　（昭・50）

（松崎鉄之介）

雁なくやひとつ机に兄いもと

安住敦

昭和二十年十二月二十五日に印刷の出来上った「春燈」の創刊号に久保田万太郎の選を経て発表された句である。同時発表の句に、「兄いもとひとつの凧をあげにけり」がある。

〈てんと蟲一兵われの死なざりし〉は敦の終戦の吟として既に有名だが、対戦車自爆隊員として安房上総の戦陣に在っても「蟬時雨子の誕生日なりしかな」と抒情を守り続けていた敦にとって、「われの死なざりし」は、まさに抒情の勝利の言挙げだと言っても過言ではあるまい。

妻子の許へ帰還した敦の周囲は、荒廃と飢餓と貧困の渦巻く世界であった。しかし、敦は敢然として、かねてから念願の万太郎を擁して「春燈」の創刊に奔走し、抒情復興を実現したのである。それは文字どおり「春の燈」のごとく荒んだ人々の心に安息と希望を与えたことは言うまでもない。

―僕はいかに落ちぶれても生活のために俳句を奴れいなどにしない―

―感情の露呈ゆえにその俳句が価値のないものとなる、そのやうなものであったら、私はいさぎよく俳句をすて〻短歌なり短詩をつくらう。が、そんなものではないと思ってゐる。―

―とまれ僕は、僕の俳句を僕の生活から詠ふより外はない。僕は依然として、女房子供を主題とし、日常生活に取材して句をつくっていかう。つまり、所詮僕にとっては俳句は私小説である。―

当時の敦の文章から引用したものだが、三十余年経た現在においても、その信条は一貫して変らない。「四季と共に人生があり、人生と共に花鳥がある」のである。

掲出の句の「ひとつ机」は当時のことだから、焼け残った小さな食卓、あるいは林檎箱などであったかも知れない。いずれにせよ小さな机一つに、幼い兄妹が睦みあっている姿にスポットを当てて描き出している。おりから窓の外の空を雁が声を落しながら北から渡って来ている状景を「啼くや」という詠嘆と共に大きく展開しているのである。近景と、遠景を大きく広がらせた調和が見事な句だとも言えよう。

しかし、この句を以上のように視覚と聴覚だけに頼って状景を映出しただけでは、まだ鑑賞が浅いと言わねばなるまい。

幼ない兄妹にいとしみの眼ざしを注ぎ、雁の声に耳を傾ける作者が背後に在ることを忘れてはならない。作者の心にのみ聞えた雁の声であったかも知れない。雁の啼く蕭条たる野の景が、作者の心を占めていたようでもある。

肉身のわが子のさまを描くと同時に作者自身を詠っている句なのである。

この句は、何も作句年代の戦後にさかのぼって解する必要はない。現在の高層マンションの一室だとしても一向に差支えはなく、充分に鑑賞の世界を繰りひろげてくれる。

そのように永久的な句の寿命は、ひとえに、この句に作者のもつ豊かな抒情にあふれているからなのである。

（成瀬桜桃子）

秋光（根来寺）

近畿には大小を問わず有名無名の寺院は実に多い。中にはかつて僧房幾百を誇り栄えた寺が、今は世に忘れられようとしている。根来（ねごろ）寺は大阪を南下して和歌山県に入って間もないところにある。小さな町を抜けて来て仰ぐ山門の大きさにまず驚く。然し門の内には屋があったり、わずかに残る塔頭と、秋草に埋もれんばかりに堂はあった。

こんな秋暮荒寥の景に惹かれたのも、筆者がその頃大きな喪にいたせいかも知れない。いまはもう見違えるほどの新しい姿貌を遂げているであろうか。

荒廃を憂し秋声の中にをり

（文・写真　沢田弦四朗）

季節の窓

成果をあげて

岩手俳人協会第1回鍛練会終わる

岩手県俳人協会の第一回鍛練会は、七月二十二日、二十三日の両日、岡田日郎俳人協会幹事を講師に迎え、湯田町湯川温泉万鷹旅館を会場として開催された。参加者は女性五名、横手市在住協会員一名を含む二十六名であった。

鍛練会第一日、十四時三十分陸中川尻駅前に集合、参会者の自家用車に分乗し、秋田県境の鹿島様（身丈十二～三㍍の厄払人形）、白木野部落の藁の厄人形、番所跡などを巡り、十七時開会行事、岡田講師より「流派を越えての鍛練会は俳人協会はじまって以来のこと、成果を期待する」との激励を受け、第一回句会。夕食後二十一時より第二回句会、就寝は二十四時近くとなる。

第二日、起床後各自付近自由散策、朝食。八時二十分昨日同様自家用車に分乗し、土畑鉱山跡をたずね、十時より第三回句会。昼食後二日間計三回の成績発表、高点順十名に俳人協会よりの賞品を贈る（特に上位三名には小林定雄作の湯田こけしを贈る）。なお、各回の岡田講師特選句に対してはその都度木地達磨を授与。最後に岡田講師に参会者の謝意をこめて記念品を贈呈して閉会。十三時解散。

連日の炎天下、終始真剣、和気あいあいの中に進行、協会員の親睦、地方俳人との交流等所期の目的が達成されたものと考える。

各回の岡田講師特選句は次の通りである。

第一回句会

葉腐ちても厄人形夏木立　照井ちろじ

鳴き止みし蟬声つぎの声蓄ふ　堀米　秋良

森二つありて蜩二夕たむろ　沢藤紫星

第二回句会

和賀川の上流支流蟬時雨　安田汀四郎

峡谷に風向き違ふ葛の花　岩城　晴月

夜鷹飛び湯治宿また湯治宿　菅原多つを

第三回句会

廃鉱の鉱山長屋草いちご　金沢　希美

夜濯の湯女にとどかぬ山の月　中村　青路

廃鉱のずり山赤し竹煮草　金沢　希美

（菅原　多つを記）

「さいかち」

創刊五十周年記念　全国夏行俳句大会

「さいかち」は昭和三年六月創刊され、本年で五十年の歳月を重ねた。その記念すべき全国夏行大会が八月十九、二十日の両日、京都のハホテル・石長〉で盛大に開催された。全国に散在する四十余の各支部から続々と申込があり出席者は百三十余名に達した。

三年前逝去された自得先生の遺徳を偲び、加寿女主宰のもと新しい前進を確め合った意義深い二日間であった。

加寿女主宰の挨拶のあと、本橋定晴氏による「さいかちの歩み」と編集長田中水桜氏の「俳句のきびしさ」の講演があった。

二回にわたる鍛練句会に苦しみながらも会員相互の親睦を深め合い次なる六百号記念大会での再会を誓い合って散会した。

（田中水桜）

編集室から

▽…この間のベルギーの俳人バルト・メゾテンさんの来館については先月号に既報の通りだが、同氏に俳句の色紙を見せたとき、「タイプライターで打っても同じではないですか」と言われたのには驚いた。なるほど、そういう見方があるのだと思った。日本語のデリケートな味はこの紅毛碧眼のハイク作家には判らないのだった。

▽…これは日本の話だが、このごろ手帳に俳句を書くのに、横書で書く人がいる。縦書の手帳が入手し難いためだろうか。メゾテンさんのタイプライター問答ではないが俳句を横書にしても、その味は変わらないものだろうか。これは、縦書だが、句会で書き抜いてゆくのに左から書き始める人がいる。手がよごれなくてよいというのだが、奇異な感じがした。

ここまで書いたら夕刊が来た。外国映画の広告を見ると、大部分がカタカナ英語「ハイスクール」「イッツフライデー」「スターウォーズ」など六つ。日本語は「名探偵再登場」など二つ。若い人には漢字より、カタカナ英語の方が判り易いのか。

▽…そういう時代の中で、教室で俳句を教える先生たちの苦労はたいへんだろうと思う。国語研修会での受講者の真剣な表情にもそれがうかがえた。

本号は、研修会と俳人協会賞作家の近況に大きなスペースを取った。いくつかの原稿を来月回しにしたことをお許し願いたい。

▽…やっと涼しくなって来た。今年の夏は暑くて、長かった。大震災の年の夏に似ていると誰かが言った。

（草）

「自註現代俳句シリーズ」より抜粋

「田村了咲集」より

コスモスや看護婦ふたり住む官舎　昭和一六年作

郊外、陸軍病院に勤める看護婦の官舎。たいてい二人ずつ住んでいる。庭のコスモスの花盛り。もちろん、日本のうら若い女性。

「遠藤梧逸集」より

秋ざくら径に溢れて豊の秋　昭和一六年作

虚子先生の来阪に際して、西郊星ヶ岡茶寮で京阪神の同人会が催され、同人でない私もその席に加えられての一句。いつか代表作になった。

「桂樟蹊子集」より

コスモスを妻ゆく丈にはかりゐし　昭和二七年作

庭へ出て干物をしている妻と、コスモスの草丈を見比べている。コスモスも一六五センチぐらいになったようで、もう花梗が出てくるころと思う。

自註現代俳句シリーズ

第二期四十冊（五十音順）

安住敦集、井沢正江集、石原舟月集、石城暮石集、遠藤梧逸集、小原菁々子集、及川貞集、大橋敦子集、岡田日郎集、岡本眸集、加倉井秋を集、桂樟蹊子集、亀井糸游集、北野民夫集、小林康治集、斎藤玄集、沢木欣一集、下村梅子集、鷲巣あや集、進藤一考集、鈴木真砂女集、田村了咲集、高木晴子集、龍岡晋集、千代田葛彦集、徳永山冬子集、中山純子集、西村公鳳集、西本一都集、能村登四郎集、野見山ひふみ集、古館曹人集、星野立子集、星野表丘人集、堀口星眠集、松崎鉄之介集、松村蒙石集、村越化石集、山口波津女集、山田みづえ集

装本、編集などすべて第1期に準じます。

第一回発売　昭和五十三年七月　以後毎月三冊ずつ刊行

一冊　八八〇円（送料一二〇円）

全四十冊一括申し込み三万円（送料共）一万五千円ずつ二回分割支払をご利用下さい。

東京都新宿区百人町三―二八―一〇

申込先　社団法人　俳人協会

電話　〇三（三六七）六六二一番

振替　東京　六―一七三番

『俳句かるた』三部作（各句解説付）の頒布について

① 山口誓子鑑修　俳句文学館編著　「動物俳句かるた」　一、二〇〇円

② 水原秋桜子鑑修　俳句文学館編著　「俳句いろはかるた」　一、六〇〇円

③ 山本健吉選著　「百人一句、古今名句百選かるた」（別冊解説付）　五、八〇〇円

※対象はそれぞれ①小学生中心②中学生中心③高校生以上を想定しています。幼児から一般愛好家まで楽しめる名句、佳句集です。

送料は実費とします。

申し込み先　〒160　東京都新宿区百人町三―二八―十

俳句文学館　俳人協会出版部

振替　東京　五―五二七七